

過去2国に渡り、学級崩壊をはじめとする現在の子どもたちの抱える問題点と、その背景について紹介してきた。子どもと教育の危機の根深さを感じつつ、新しい時代の中で新たな感性を持った子どもたちの存在に希望を見ることができた。今回は、危機を乗り越え、新しい社会の担い手を育てるために何が求められているのかについて報告していきたい。

上からの改革路線に欠けているもの

今まで述べてきた教育の危機の対し、当然ながら政府側もこれまでの改革の範囲を大きく超えた変化を生み出そうとしている姿勢が伺える。具体的な改革は次の4つの柱である。

①心の教育の充実—これまでの詰め込み型の画一的な教育から脱却し、道徳教育やカウンセリングを充実させ教育内容の見直しを行い、子どもの「ゆとりある学校生活の実現」をはかる。これによって自ら学び、自ら考える人材を育て、「生きる力」を形成しようとする。

②多様な選択ができる学校制度—公立の中・高一貫校の開設や小・中学校の学区域の弾力化を図る。

③自主性尊重の学校作り—これまでの閉鎖的で画一的と言われてきた学校の体質を改善するために、民間人の校長を登用したり、校長の権限を強化したり学校評議員制度を設けるなど地域や保護者の意見が反映しやすい「開かれた学校づくり」の推進に力を注ぐ。

④大学改革—(略)

(我が国の文教施策—進む「教育改革」平成11年度版)

尾木はこれらの改革路線に対し、「一見自由で可能性に満ちた方策のように錯覚させられるが、第1に住民や学校の現場、子どもの声を聞かないで常に「上からの一方的改革」としてなされ、第2にそれぞれが孤立し、競争原理の中で自己責任を負う状況になる危険性が大きい。つまり、最大の問題は、教師や児童・生徒、地域住民の共同した学校作りや参加を尊重するという民主主義の観点の欠如にある」と指摘している。

私たちに求められているもの

まとめる前に一言伝えておきたい。体育同志会でみんなが大切にしてきたことの多くが、文献の中で目指すべき方向として示唆されている。

(1) 子ども・教師・地域の参加を!

学校作り(授業作り)への子どもたちの参加。教師の手のひらの上での自主性・自治を飛び越え、子どもたらに「自己責任感」学校(授業)の構成員としての自覚を高める。それにより、子どもたらにの自尊感情を育むとともに、どんな状況の変化に対しても子どもたらが主役として学校に位置づき、自己肯定感を高め、自己責任能力が身についてくれば、いかなる危機ものりこえることができるのでは、と尾木は述べる。そのためには教師も、教室実践のイメージの中に閉じこもらず、児童・生徒、保護者とも対等のまなざしで接することが必然となる。

子どもを主役とした授業作り。泥臭いと言われながらも(?)、オリエンテーションで時間をかけ、子どもとのルール作りに時間をかけ、「主体者形成」という理念の元、子どもとの合意を大切にしながらの授業作りを目指す同志会の取り組みと尾木の主張は重なり合うところがある。

(2) 「教え」から「学び」へ

尾木も「できる」「わかる」という言葉を使っているが、同志会の中でも「わかってできる」ことを大切にしてきた。方法論として単に「できる」ことを目指してきたのではなく、「体育の科学」という言葉に代表されるように「運動技術」を科学的に理解し、実践する力を求めてきたのである。文中では「基礎学力」にこだわるが故の画一的な一斉指導を「教え」と定義し、「静」の授業と提えており、本来目指すべきものは「動」の授業であり、それを「学び」と定義している。「動」の授業として、一つは「総合的な学習の時間」での展開に期待を寄せているが、今までの先人たらが作ってきた「学び」の授業実践にも着目し、改めて「科学・芸術・文化を育ててきた人間の知恵と心を知ることは子どもにとって喜びである」(今泉より引用)と結んでいる。

「教えたい中身」を「運動文化」と定義し、教科内容を追求してきた同志会、そして、画一的な学習スタイルではなく「動」の視点に立脚した同志会の「グループ学習理論」は、まさに、子どもの「学び」を引き出す取り組みであったことを再認識することができるのである。子どもたちの危機から脱却をはかるには我々の実践を今一度振り返り、「子どもが主人公」となる授業の構築と、それらを達成できる授業の流れ、すなわち、子どもたちが自ら学びとる「グループ学習」を追求することがはじめの一歩となるのではないだろうか。